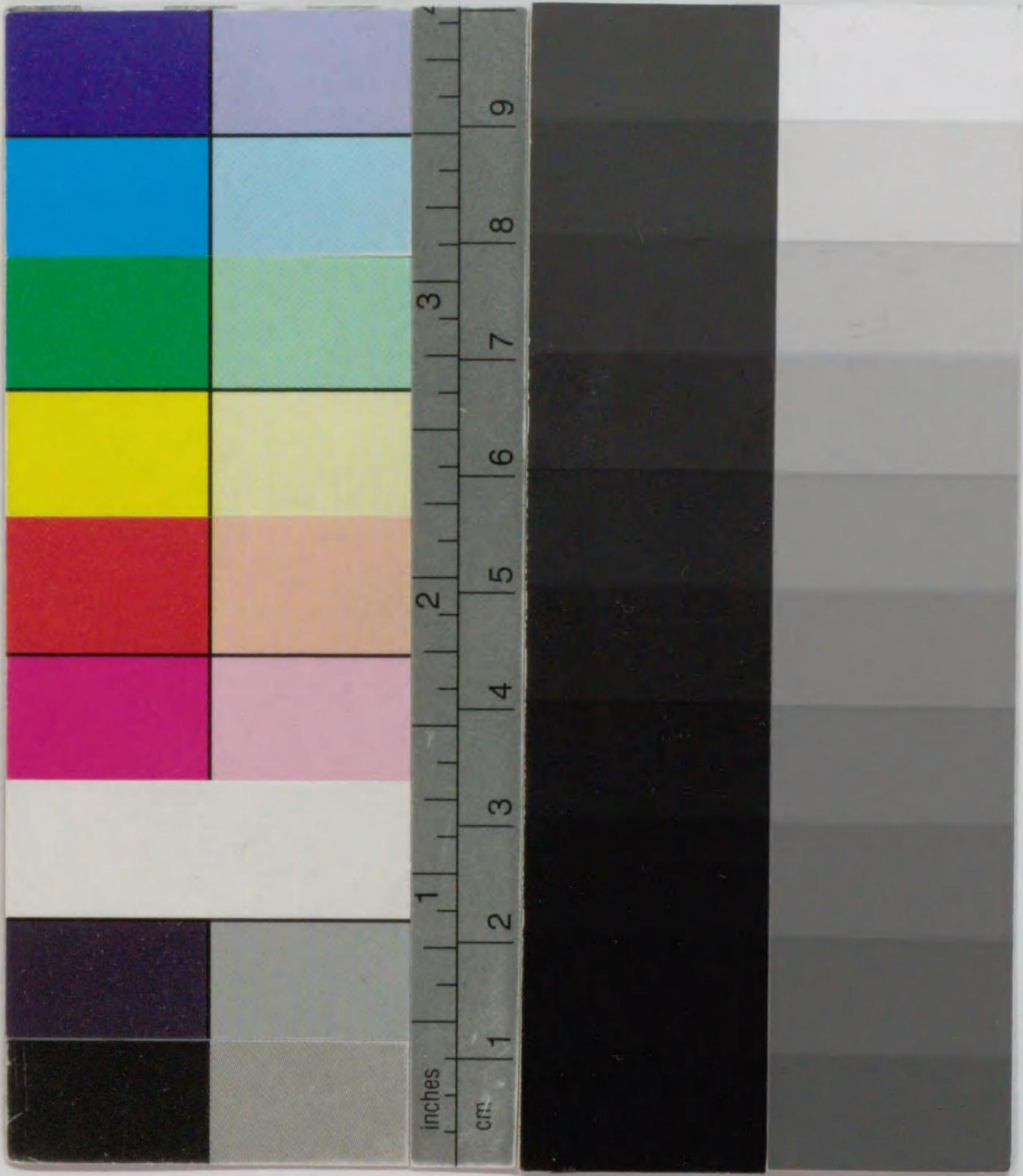


186
241

186-241
1200800025862

紙
題
詠
進
の
架

國
書
藏



和

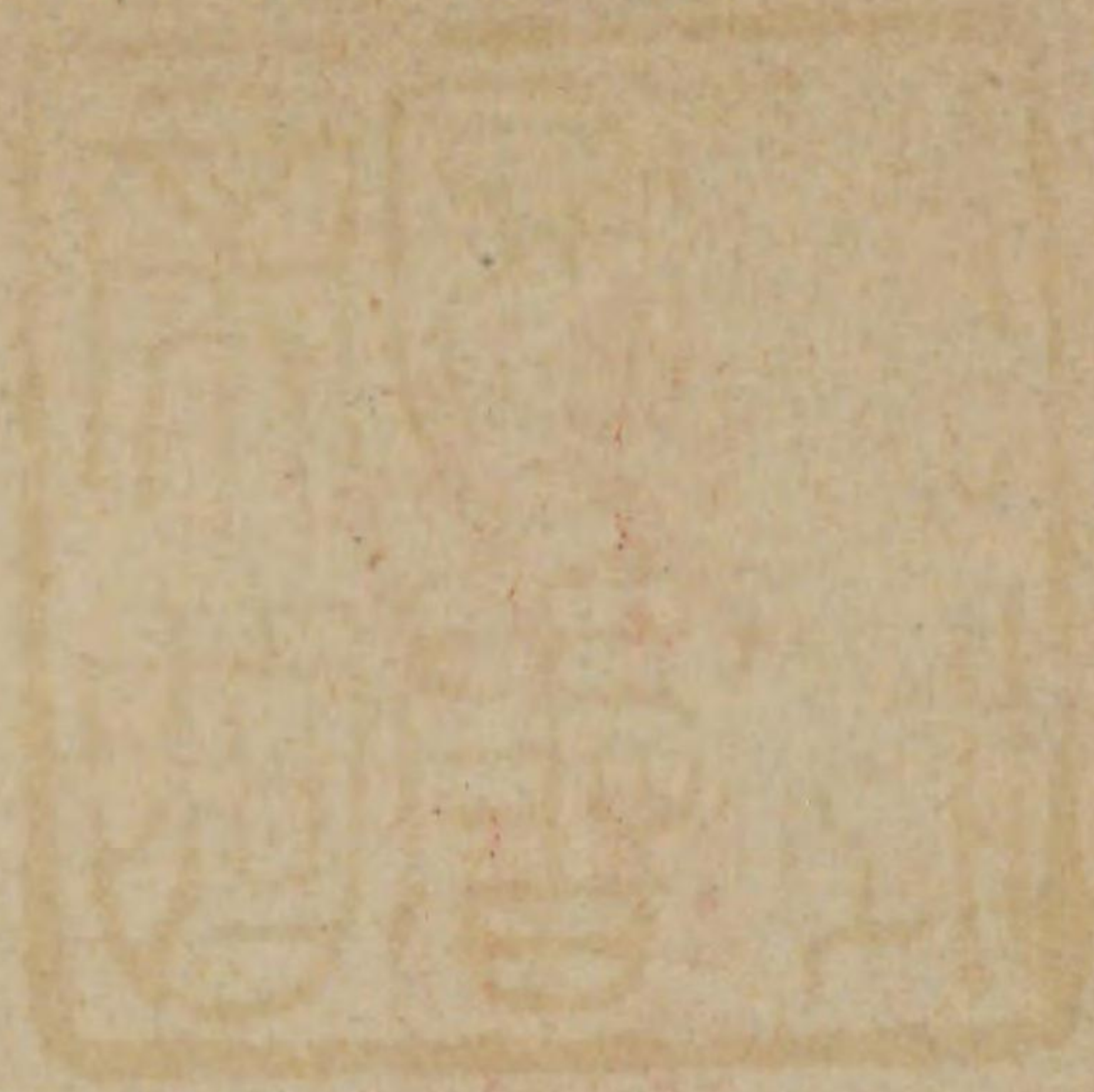
勅題詠進の葉

186-241



勅題
題詠
進の
集





緒言

本書は大正八年歌御會始勅題詠進者のてびきにもとのせしなりもとより此の道にたけたる人の爲とにはあらず、またく初心の人のためにとてせるなり、見む人そのこゝろしてよ。

大正七年十一月

編者しるす

勅題詠進の棊

歌御會始の次第

歌御會始は、例年一月十八日、宮中鳳凰間に於て行はせられるのであります。若し御當日が日曜に當るときは、其の翌日を用ゐさせられ、又臨時御差支あらせられる場合には、其の御日取を御變更あらせられるのであります。此の御儀式の行はせられるに先だつて、御會始に參仕すべき所役を定めさせられます。所役とは題者一人、點者一人、奉行二人、讀師一人、講師一人、發聲一人、講頌四人であります。題者は御題を出すことを承はるもので、御歌所長これを勤め、點者は

ありませぬ、題者は御題を出すことを承はるもので、御歌所長これを勤め、點者は詠進の歌を選することゝ掌るもの、是れ亦御歌所長が勤める、奉行は式場の鋪設整理を始め、御當日御儀式萬般の事務を掌る役であります。讀師は歌讀上の式

を總理し、講師をして歌を讀み上げしめる役、講師は歌を讀み上げるもの、發聲は講頌中の一人で、各歌の初句を詠じ出し、講頌は發聲に繼いで、第二句目から同音に朗詠する役であります、又別に御製講師、御製講師といふ役があります、これは聖上御即位後初の御會始、即ち御代始の時、若しくは何か特に改まつたこととあらせられる年の御會始の場合に置かせられるもので、例年の御會には設けられませぬ。

勅題は毎も其の前年の十月十五日に御發表あらせられるものでありますが、之は題者が御題を選んで、勅裁を仰いだ上官報を以て一般に達せられるのであります。一般臣民は御期日までに御歌所へ宛て、詠進するのであります。御歌所では其の詠進の歌を點者たる御歌所長が寄人を召して、一々評論選擇の末、預選歌を決定して、御當日御前に於て披講せられるのであります。

御當日の御模様は誠に森嚴を極めたものと漏れ承はります、仄に承はる所を

記し奉れば、御當日、奉行式場を整理し、午前十時に至れば、題者以下所役一同おのゝく定め席に着く、奉行懷紙を中央の案上に置く、次に御詠進の皇族方御着席、大臣次官侍從長侍從武官長以下又所定の席に着く、次に東宮殿下御着床あらせられ、やがて奉行より出御を奏請し奉る、即ち聖上皇太后兩陛下出御あらせられます、是に於て講師先づ席を起つて中央披講の席に進み着き、懷紙を整へて講師に目する、講師、讀帥の目を受けて、同じく披講の席に進み着く、次に發聲講頌の諸員一同席を起つて披講の席に進み着く。

披講の順序は下位のものより上位のものに及ぶを法とするものであります、其の作法は先づ講師、奉行の置いたる懷紙を左方に取り置き、御硯蓋を俯けて、其の上に懷紙を御前に向けて引延ばし置く、即ち各皇族方を始め大臣より下位に至る順序に重ねてあるのを、最下位のものより順に引き出して置くのである。次に講師聲を上げて「年の始めに(題)といふことを仰言によりてよめる歌、何の某

(姓名)と詠進者の姓名をも読み上げて、直ぐに歌の初句二句三句と、一句毎に一息半の間を置いて読み、四句五句は少しく早く、句の切は半息の間を置いて一首を読み畢ると、發聲は直ちに其の初句を朗詠する、第二句からは講頌の諸員一齊に聲を合せて詠するのであります、かくて大臣以下所役並に預選の歌は、おの／＼一反の披講であります。

次に皇族方の御歌は同じ作法によつて、おの／＼二反づ、講じ、畢つて講師披講の席を退かうとする、講師之を召し留める、これは極めて嚴格に御儀式を行はせられる時には、東宮殿下、聖上皇后兩陛下の御懷紙を講じ奉るは、今一層身分高き人を以て講師とせらるゝのでありますから、これまでの講師は退かうとする、所が通常の御儀式には、講師を替へさせられることもありませんから、講師が其の儀奉仕して苦しからずと認めて、退かうとする講師を召し留めるのであります。

次に講師は東宮殿下の御懷紙をば、披講席の傍なる案上の御小蓋より捧げ持ちて披講の席に退き、御懷紙を引き延べ、御前に向けて御硯蓋の上に置く、講師、講師、發聲、講頌の諸員一同起立拜見、畢つて席に着く、講師先づ之を奉讀し、發聲講頌これを講ずること二反、其の作法は前と同じであります、此の時一同起立、發聲講頌の人を除くの外、披講中は講師講師も一同と共に起立するのであります、披講畢つて講師御懷紙を巻き收めて、元の所に返進するのであります。次に講師、皇后陛下の御前に參進して、御懷紙を賜はり、捧げ持ちて披講の席に退き、御懷紙を引き延べ、御前に向けて御硯蓋の上に置く、講師、講師、發聲講頌の諸員一同起立拜見、畢つて席に着く、講師先づ之を奉讀し、發聲講頌これを披講すること三反、披講の作法は前と同じく、此の時一同起立すること前と同じであります、披講畢つて講師御懷紙を巻き收め、始めの如く御前に參進して之を返上し奉るのであります。

次に讀師 聖上陛下の御懷紙を賜はり、作法前の如く之を講ずること五反、披講畢つて所役直ちに披講の席を退き、各自元の席に復る、讀師御懷紙を卷き收め初めの如く御前に參進して之を返上し奉り、畢つて席に復るのであります、御儀式はこれで畢ります、聖上皇后兩陛下入御あらせられ、續いて參列の人々退出し、所役及寄人參候には別室に於て酒饌を賜はるのであります、當日預選を得て御前披講の光榮を荷へる人へは、左の書式を以て御沙汰あらせられるのであります。

何 某

御 題

(歌)
 右 本 年 歌 御 會 始 詠
 進 之 歌 依 點 者 之 撰
 於

御 前 披 講 相 成 候 也
 年 月 日

歌御會始奉行

又一般より詠進したる歌は、之を各府縣別に區別して製本したる上、乙夜の覽に供し、叡覽濟ませられたる後、皇后陛下の御手許に御廻しあらせられ、御覽遊ばされるのでありますから、たとひ選に漏れて御前披講の光榮には預からずとも、詠進者は均しく兩陛下御覽の榮を忝うするのであります。

抑も歌御會始は、明治天皇古來の御儀式によつて、明治二年より之を始めさせられ、最初は皇族華族勅任官をして詠進せしめ給ひたるものでありましたが、明治五年に至り、判任官まで歌道に心がけあるものは詠進すべしと仰せ出されましたが、七年には一般臣民の詠進を許され、其の詠進の歌は各府縣別に製本して當日叡覽に供し奉ることゝなりました、所が十二年からは一般臣民の詠進中より

八
點者の選によつて優秀なる歌五六首を、一座の懷紙に加へ、御前に於て披講せしめられること、なつたのであります。

詠進者の心得

大正八年御歌會始の御題は、去る十月十五日宮内省告示を以て『朝晴雪』と仰出されました。それについて御歌所寄人大口鯛二氏の談として東京日日新聞の紙上に載せられたものを紹介させよう。

『朝晴雪』といふ御題は爽快な景趣の目に浮ぶ御題で、新年の御歌會始には最も適したもの、詠進者も大に詩情を發揮せらるゝであらうと思はれる、但し此の御題は明治の御代にも嘗て仰出された事もなく、古今集以後の撰集には見えぬ題であるから、類題集などを涉獵しても作例は見當らぬ、併しながら『朝雪』或は『晴雪』などいふ題はあるから、此の中で此の御題に適當と思はれる古い歌を少

し擧げて見ると、『初みゆき晴れたる朝に見渡せば里のけぶりも珍らしきかな、眞淵見渡せばふりつむ雪をありあけの月にみがける多摩の横山、千蔭』等作例とも見るべき所である。併し作例を真似て歌を作つては、千人萬人皆一様のものになつて、自分の歌とはならぬ、斯様の處は誰もいふのであるから、此等の景趣の外に何か一つ感興を得ようには、斯様の景趣は歌として皆面白いから、自分が嘗て雪の朝にかういふ景趣に接して、かういふ感じを起した、一つ歌にして見ようといふやうに考へるのは作例に對しての心持でなくてはならぬと私は思ひます。右の大口寄人の談によつて御題に對する詠進者の心得一通りは盡されて居ると思ひます、今更蛇足を加へるまでもないことではあります、力めて清新な高雅なものをと心がけられることが最も肝要であります。

詠進の書式は毎も官報に詳細に載せられてありますが、それでも年々可なり違式のもの詠進する人があるやに承はつて居ります、猶念の爲に左に其の書式を

◎注意

住所族籍苗字名は圖に示したる如く必ず端より二折目の處へ詳細に認めるのであります。又官位勳功爵を有する人は、苗字の上に之を認めるのであります。

用紙は檀紙、奉書、杉原紙、又は美濃紙に限るのであります。其の他の紙ではいけません。さて是等の用紙を堅詠草ですから、真中より二つに折り、更に之を五つ折にするのであります。右の圖に示した…は紙の折目を示したものであります。之を郵便で差出すには、五つ折にしたまゝを二つに折つて封筒の中に入れます。其の封筒の表面には「宮内省御歌所」と認めて出せばよろしい。名は必ず實名を書くべきものであります。雅號などを書いてはいけません。又名の下に印など捺したのが間々あるやに承はりますが、印は決して捺すべきものではありませぬ。

詠進は一人一首限りでありますから、其れ以上を出すことはなりません。又詠進中遠式のもの、省かれるやに承はつて居ります。前に述べた注意事項をよく心得て、遠式にならぬやうになさい。

作 例

作例としてこゝに挙げたものは、必ずしも御題たる『朝晴雪』の題意に合つたものばかりではありません。朝の雪や晴れたる雪を詠んだものを集めたのであります。又曉の雪のけしき、曙の雪のけしきなどを詠んだものも集めてあります。是等は初心の人々が御題朝晴雪に對する感興をどんな風に詠んで好いか、又どんな詞づかひがあるかを考へられる資に供したまででありますから、其のつもりで見たい、古人の糟粕を嘗めるといふことは、歌の上についても決して感心すべきことではありません。是等の作例に害せられないやうに之

を見ていたいくのが肝要かんようであります、併しかし初心しよんの人々ひとぐの爲ためには用語ようごの参考さうかうにはな
ることと思おもひます。

ゆきふれば冬ごもりせるくさも木も春にしらぬはなぞ咲きける 紀 貫之

しらゆきのところもわかすふりしけば巖にもさくはなとこそ見れ 紀 秋峯

浦ちかくふりくるゆきはしらなみのすゑのまつ山こすかとぞみる 藤原 興風

ふゆながらそらより花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらむ 清原深養父

ふゆごもりおもひかけぬを木のまより花と見るまで雪ぞふりける 紀 貫之

あさばらけありあけの月と見るまでに吉野のさとにふれるしら雪 坂上 是則

年ふれどいろもかはらぬ松が枝にかゝれるゆきをはなとこそ見れ 讀人 不知

あらたまの年をわたりてあるがうへにふりつむゆきのたえぬ白山 同

しらくものおりゐる山とみえつるはふりつむ雪のきえぬなりけり 同

松の葉にかゝれるゆきのそれをこそふゆの花とはいふべかりけれ 同

よるならば月とぞ見ましわがやどの庭しろたへにふれるしらゆき 紀 貫之

見わたせば松の葉しろきよしの山いくよつもれる雪にかあるらむ 平 兼盛

あさばらけゆきふるそらを見わたせば山のはごと月に月ぞのこれる 源 道濟

しらなみのたちわたるかと思ゆるかな濱名の橋にふれるしらゆき 前齋院尾張

ふるゆきに杉の青葉もうづもれてしるしもみえず三輪のやまもと 皇后宮攝津

ゆきふればいやたか山のこすゑにはまだふゆながら花さきにけり 藤原 行盛

みやこだにゆきふりぬればしがらきのまきの杣山あとたえぬらむ 隆源 法師

よるづ代のためしとみゆる松の上に雪さへつもある年にもあるかな 源 頼家

くれなるに見えしこすゑも雪ふればしらゆふかくる神なびのもり 藤原 忠通

朝戸あけて見るぞさびしき片岡のならのひろ葉にふれるしらゆき 源 經信

おしなべて山のしらゆきつもれどもしるきは越のたかねなりけり 藤原 通俊

とやまにはしばの下葉もちりはてゝをちのたかねに雪ふりにけり 藤原 顯綱

ふるゆきに谷のかけはしうづもれてこすゑぞふゆの山路なりける
 山ざとの垣ねはゆきにうづもれて野べとひとつになりけるかな
 なみまより見えしけしきぞかはりぬる雪ふりにけり松がうらしま
 ましばかる小野のほそみち跡たえてふかくも雪のなりにけるかな
 つねよりもしのやの軒ぞうづもるゝけふはみやこに初ゆきやふる
 ながむればわが山の端にゆきしろしみやこの人よあはれとも見よ
 あらはれてとしある御代のしるしにや野にも山にもつもるしら雪
 しきしまやふるのみやこはうづもれてならしの岡にみ雪つもれり
 宮木ひくそまやま人はあともなしひばらすぎはらゆきふかくして
 さびしさはいつもながめのものなれど雲間のみねの雪のあけばの
 山たかみあけはなれゆくよこぐものたえまに見ゆるみねのしら雪
 あけわたる雲間のほしのひかりまで山の端さむしみねのしらゆき

源 俊頼
 藤原 實定
 顯昭 法師
 藤原 爲季
 瞻西 上人
 慈鎮 和尚
 藤原 實氏
 藤原 長方
 同
 藤原 良經
 源 實朝
 藤原 家隆

里のあまのさだめぬ宿もうづもれぬよするなぎさの雪のしらなみ
 わだのはらやそしましらくふる雪のあまぎるなみにまがふつり舟
 つま木こる山路もいまやたえぬらむさとだにふかき今日のしら雪
 かりごろもすそ野もふかしはしたかのかへる山のみねのしら雪
 たむけ山もみちのぬさはちりにけり雪のしらゆふかけぬ日ぞなき
 山ざとはいくへかゆきのつもるらむ軒端にかゝるまつのしたをれ
 庭のゆきに今日こむ人をあはれともふみわけつべき程ぞまたれし
 けぬが上にさこそは雪のつもるらめ名にふりにけるこしのしら山
 時しらぬやまとはいへど富士のねのみ雪もふゆぞふりまさりける
 なにはがた蘆の葉しのぎふる雪にこやのしのやもうづもれにけり
 ふりつもる雪ふきかへすしほ風にあらはれわたるまつがうらしま
 ふる雪の晴れゆくあとの波の上に消えのこれるやあまのつりぶね

八條院高倉
 藤原 家隆
 藤原 公經
 藤原 雅經
 藤原 道家
 藤原 良經
 寂蓮 法師
 安嘉門院甲斐
 藤原 基雅
 大江 匡房
 藤原 光俊
 平 泰時

けふ幾日ふるのかみすぎ見えぬまで手向にあけるゆきのしらゆふ
 問へかしのあともいとはで待たれけりまだ空はれぬ庭のしらゆき
 明けぬとて出でつる人のあともなしたゝ時のまにつもるしらゆき
 けさ見ればゆきも津守のうらなれや濱まつが枝のなみにつくまで
 あさなくよそにやは見るますかみむかひの岡につもるしら雪
 さゆる夜のあらしの風にふりそめてあくる雲間につもるしらゆき
 矢田の野のあさぢが原もうづもれぬいくへあらしのみねのしら雪
 山の端はそれとも見えすうづもれて雪にかたぶくありあけのつき
 さとびとのかよふばかりの道をだにまだふみわけぬけさのしら雪
 はつゆきに我とはあとをつけじとてまづあさたむ人を待つかな
 けさのまにふりこそかはれしぐれつるのちせの山のみねのしら雪
 はてはまた松のあらしもうづもれてしづかにつもる山のしらゆき

源 隆親
 藤原 隆祐
 藤原 定家
 慈鎮 和尙
 藤原 知家
 藤原 為氏
 藤原 為家
 源 通氏
 讀人 不知
 藤原 清輔
 藤原 公世
 藤原 隆教

よもすがらふりつむ雪のあさばらけにははぬ花をこすゑにぞ見る
 いつのまにとはずと人をうらむらむ今朝こそつもれ庭のしらゆき
 朝あけのひがたをかけてしほつ山ふきこすかせにつもるしらゆき
 和歌の浦にふりつむ雪もけふしこそ代々に變らぬあとは見ゆらめ
 ながめやる浪間やいづこしらゆきのまたふりうづむあはぢしま山
 夜もすがらさとはしぐれてよこぐものわかるゝ峯に見ゆるしら雪
 今朝みればとほやましろしみやこまで風のおくらぬ夜はのはつ雪
 見わたせばあけわかれゆく雲間よりをのへぞしろき雪のとほやま
 さえこほる雲は晴れゆくあさあけの日かげにみかくゆきの山の端
 ふりつもるこすゑや今朝はこほりぬる風にもおちぬ松のしらゆき
 そらさむきとやまの雲はなほとちて里より晴るゝゆきのあさあけ
 今朝はまたあと見えぬまでつもりけりわがわけそむる峰のしら雪

源 師重
 平 宣時
 津守 國助
 藤原 基忠
 源 雅言
 藤原 實俊
 宗尊 親王
 賀茂 久世
 藤原 内實
 藤原 冬平
 藤原 顯資
 平 貞時

雪ふればやまのはしらむあけがたの雲間にのこるつきのさやけさ
 ふみわけしきのふの庭の跡もなくまたふりかくす今朝のしらゆき
 しほかせに立ちくる波と見るほどにゆきをしきつの浦のまさごぢ
 あけわたる波路のくものたえまよりむら／＼しろきゆきのとほ山
 夜半のあらしはらひかねけり今朝みれば雪のうづまぬ松杉もなし
 ふりつもるうち野の原の雪のうへをわくるあさけの袖のさむけさ
 へだてつるかきねの竹もをれふして雪に晴れたるさとのひとむら
 月かげはもりのこすゑにかたぶきてうすゆきしろしありあけの庭
 そらはなほまだ夜ふかくてふりつもる雪のひかりにしらむ山の端
 天の戸のあくるそらかとみえつるはつもれる雪のひかりなりけり
 ふりにけるあとにこゝろのとゞまるは高津の宮のゆきのあけぼの
 夜のほどにつもりにけらし昨日まで見ざりし山のみねのしらゆき

藤原 家平
 藤原 俊光
 藤原 爲子
 藤原 隆康
 前僧正仁澄
 藤原 隆博
 藤原 雅孝
 永福門院
 藤原 爲世
 小 辨
 藤原 隆信
 藤原 爲顯

野も山もうづもれにけりたかまどのをのへの宮のゆきのあけぼの
 晴れぬればのこる山なくつもりけり雲間に見つるみねのしらゆき
 神がきにゆきのしらゆふうちはへてなびくと見ゆる松のしたをれ
 さゆる夜の風はおとせで明けにけり竹の葉うづむ今朝のしらゆき
 鐘の音にいまやあけぬとながむればなほ雲ふかしみねのしらゆき
 來ぬ人も今朝はうらみじわれだにもあとつけがたき庭のしらゆき
 こゝろのみ野にも山にもあくがれて道こそなけれゆきのあけぼの
 朝まだき人よりさきにいそぎてもなほあと惜しき野邊のしらゆき
 庭はたいしもかと思ればをかへの松の葉しろき今朝のはつゆき
 みよしのやすい吹く音はうづもれてまきの葉はらふ雪のあさかせ
 ふりつもるこすゑの雪やこほるらし朝日ももらぬにはのまつが枝
 花よたゞまだうすぐもる空のいろにこすゑかをれる雪のあさあけ

津守 國冬
 平 時 有
 讀人不知
 延明院門大夫
 藤原 家隆
 藤原 兼信
 津守 國夏
 藤原 爲氏
 道命 法師
 津守 國基
 藤原 賴氏
 藤原 爲子

朝日さすのきはの雪はかつきえてたるひのすゑに落つるたまみづ
 野も山もひとつにしらむ雪のいろにうすぐもくらきあさあけの空
 やまもとは竹のむらくうづもれてけぶりもさむき雪のあさあけ
 見わたせば山もと遠きゆきのうちにけぶりさびしき里のひとむら
 ぶり晴れてこほれる雪のこずゑよりあかつきふかき鳥のはつこゑ
 ぶり晴るゝあさけの空はのどかにて日かげにおつる木々のしら雪
 日かげさすそなたの雪のむらぎえにかつゝ落つるのきの玉みづ
 月のこる真木のとやまのあけぼのにひかりことなるみねのしら雪
 このさとはしぐれてさむき冬の夜のおくるたかねにふれるしら雪
 さえあかすあらしのほども今朝見えて雪にわかるゝみねのよこ雲
 月はなほくもまにのこるかげながら雪にあけゆくをちのやまのは
 今朝はまづともなふかたにさそはれて人をも待たす庭のしらゆき

前大僧正道意
 藤原 實兼
 院 一 條
 源 直義
 進子内親王
 覺譽法親王
 藤原 隆博
 藤原 實兼
 藤原 爲兼
 藤原 雅幸
 權大僧都經賢
 藤原 爲理

佐野の岡こえゆく人のころもでにさむきあさげのゆきはふりつゝ
 わたつみの浪もひとつにさゆる日のゆきぞかざしのあはぢしま山
 紀の海やおきつなみまの雲はれてゆきにのこれるうらのはつしま
 さとよりはしぐると見つる山の端にゆきを残して晴るゝうきぐも
 かよひつる夢路はあともなかりけりねてのあさけの庭のしらゆき
 つかふとてまづふみわけしこゝへの雲居の庭のゆきのあけぼの
 みなとこすしほかせさむしかるもかくゐなの端山の雪のあけぼの
 うちわたすあさけの袖もしろたへに雪をかけたる瀬田のながはし
 ふかゝらぬ雪のあさけの窓の前にさえたかたよるいさゝむらたけ
 かゝみ山あかつきがたに見わたせばあまざりあひて初ゆきぞふる
 しもがれの真萩がえだぞめづらしき遠ざとをのゝ今朝のはつゆき
 しもがれの草葉ぞしばしたまりける庭に消えゆくけさのはつゆき

藤原 道家
 藤原 爲重
 源 重光
 藤原 冬實
 源 賴武
 藤原 師賢
 藤原 家賢
 藤原 爲相
 法眼 慶融
 藤原 明信
 俊惠 法師
 藤原 爲家

まきの戸をあさけの袖にかせさえてはつゆきおつる峰のしらくも
 藤原 良經
 しのむらやみかみの嶽を見わたせば一夜のほどにゆきのつもれる
 西行 法師
 たけのぼるあさ日のかげのさすまゝに都のゆきは消えみきえずみ
 同
 やまがつのいそぐ朝戸もあけわびぬむかひの岡のゆきのふいきに
 藤原 信實
 ふりつみてあまりさえたる雪の上はさすや朝日もかげぞこほれる
 同
 あけぬるかこすゑをれふす松がねのもとよりしろきゆきの山の端
 藤原 定家
 すゝみせしならの廣葉をけさもがな日影ふせがむゆきつもるやど
 同
 あけぼのゝみねのいほりにはるゝと見わたされたるよもの白雪
 藤原 良通
 ゆきしろきよもの山べを今朝みれば春のみよしのあきのさらしな
 藤原 良經
 山ざとの雲のこすゑにながめつるまつさへ今朝はゆきのうもれ木
 同
 みよしのやをばすてやまの春秋もひとつにかすむゆきのあけぼの
 同
 しもがれのまき野の野へのけさの雪とほきこゝろを庭に見るかな
 同

雲ふかき峯のあさけのいかならむまきの戸しらむゆきのひかりに
 同
 あさ戸あけてみやこのたつみながむれば雪のこすゑや深草のさと
 藤原 家房
 ひとゝせをながめつくせる朝戸出にうす雪こほるさびしさのはて
 藤原 定家
 めづらしや今朝はつゆきに宮城野の萩のふるえにはなさきにけり
 藤原 基俊
 しらゆきのふるえの小萩けさみればあらぬ花さくみやぎのゝはら
 藤原 實雄
 しらゆきのつもるたびにもゆかしきは御狩の岡のあけぼのゝそら
 源 具氏
 しもがれはさてもものこりし冬ぐさの下をれかこつ今朝のしらゆき
 藤原 爲家
 山人のひかりたづねしあとやこれみゆきさえたるしがのあけぼの
 藤原 定家
 はつせ山をのへのかねぞあはれなるゆきのいほりのあけがたの空
 如願 法師
 あけぬとてたれか通はむかりのいほの草のかこひの雪のとざしは
 藤原 爲家
 わがやどのかきほのたにの朝戸出にゆきをれくゝる竹のしたみち
 藤原 光俊
 あとたゆる雪のあしたにかきわけてこゝろのゆくはこしのしら山
 沙彌 生蓮

われもまち人をもとはむ道ぞなきゆきのあしたの小野のやまざと
 宮木ひく民のかよひちたえにけりいづみのそまのゆきのあけぼの
 ほの見ゆるこずゑはそれか初瀬山ゆきのあしたのふたもとのすぎ
 けさみればこずゑも庭もひとつにて雪のそこなるみよしのゝさと
 ふるゆきにしばのいほりもうづもれてあけゆく鐘の聲のむらぎえ
 ひましらむまどのあけがたながむれば横雲さゆるみねのはつゆき
 朝戸あけてとほちのさとをながむればゆきの下にぞ鳥も鳴くなる
 けさはまたかさねて雪を見つるかな枯野のうへにふれるしらゆき
 おしなべて松にも花ぞさきにけるかすがのやまのゆきのあけぼの
 山たかみ千さとはおなじふもとにてながめにたどる雪のあけぼの
 はらはねば朝たつそでもしろたへのゆきをかさぬる旅ごろもかな
 みづぐきの岡のやかたはあともなしねての朝けのゆきのふかさに

寂蓮 法師
 源 光行
 藤原 俊成
 藤原 隆信
 寂蓮 法師
 藤原 忠良
 源 通親
 慈鎮 和尚
 越 前
 藤原 忠良
 度會 常良
 度會 朝棟

わがあとを人もとめてやかへるらむ今朝ふみわくるゆきのした道
 夜のまより雲のみふかくかさなりてまた一重なるけさのはつゆき
 しもがれしあとさへ今朝はたえにけり雪の下なる野へのみどりは
 あけわたるとやまもゆきの深しとや出づる日影のなほこほるらむ
 今朝もなほ人のはずば庭の雪にわがあとをしむかひやなからむ
 よもすがらつもれるほどもかつ見えて雪にぞしらむ窓のあさあけ
 旅ごろも朝たつみちのゆくすゑもまよふばかりの野へのしらゆき
 いづくをかひがたとも見むあさばらけ浪につゞきてつもるしら雪
 草のはらあきたつ野邊のゆくすゑを誰にとはましゆきのしたみち
 朝戸あけておどろかれけりさゝ竹の一よのほどにつもるしらゆき
 ふみわけて誰かとひこむいたづらにつもるもをしき庭のしらゆき
 まつかせもおとしづまりぬふる雪のつもりの浦のあけぼのゝそら

度會 家行
 藤原憲家女
 度會 貞蔭
 度會 貞香
 度會 延良
 度會 富行
 度會 延親
 度會 雅冬
 度會 朝名
 藤原 光資
 藤原 公長
 義仁親王

ふりにけりみほの松原それながらうらなみしらむゆきのあさあけ
 けさはなほきのふのうへにふりそへて名さへつもりの浦のしら雪
 すみよしのうらちあけゆく波間よりゆきにかくれぬあはぢしま山
 なるみがたうらかせ遠く吹きしきてしほひにつもる雪のあけぼの
 ふく風もおとたてぬまでよさの海の松にぞつもるゆきのあけぼの
 日かげにも猶かゝやきて山あるのをみのうらわに晴るゝしらゆき
 こずゑにはつもりもあへず松かせのふけひの浦のゆきのあけがた
 よると見し木の間のなみもうづもれぬうらわの松の雪のあけぼの
 すみよしの浦よりをちはかつ晴れて雪にぞむかふあはぢしまやま
 よもすがらしがの浦なみおとたてゝあくるなぎさにつもるしら雪
 あけわたるよさの浦波ほのゝとゆきよりしらむあまのはしだて
 關の戸はゆきよりあけて須磨の浦やなほゆきふかしあはぢしま山

藤原 實永
 藤原 公敦
 藤原 實冬
 沙彌 宋雅
 藤原 公雅
 藤原 爲尹
 藤原 實秀
 藤原 實信
 源 通宣
 藤原 宗量
 沙彌 祐信
 僧 堯尋

松はなほさだかに見えて波かせもをさまるうらのゆきのあけぼの
 わだのはらゆきにへだてし浦々もさだかに見ゆるゆきのあけぼの
 おしなべていづくの雪もかばかりや風しづかなるゆきのあけぼの

僧 滿濟
 永助法親王
 堯仁法親王

勅題預選歌集

前にも述べたる如く御題は、明治二年より賜はせられました、一般臣民の詠
 進を許させられましたのが明治七年からで、更に一般臣民より詠進の歌の選に預
 かつて、御前に於て披講させられるやうになつたのは、明治十二年からのこと
 あります、依つて左に同年からの預選歌をかゝげることゝ致します。

新年祝言 (明治十二年)

あらたまりあらたまりつゝ年々にひかりをひゆく君が御代かな
 金子有卿
 くりかへしくれどかはらぬ年のをは始をはりもあらぬなりけり
 林 信立

こゝのへの大宮ばしらあたらしくたつらむ年のひかりをぞ思ふ
世とともに我も久しきこゝちしてかさぬる年もうれしかりけり
いはひつゝ誰もむかふる年なれど千年は君のものにぞありける

庭上 鶴馴 (明治十三年)

御園生の松をちとせのねぐらにて雲居になるゝあめのたづむら
松風のおともものどけきこゝのへのくもゐの庭にたづぞなくなる
大空にあそぶ友をもさそふらむみそのゝたづのかずぞ添ひゆく
大宮のみはしのもとにすむ鶴は千代のところを得たるなりけり
あしたづも大宮づくりおもふらしくもゐの庭をふみならしつゝ
ちとせつむたづも雲居の庭にきて限りなき代にあはむとすらむ

竹有佳色 (明治十四年)

ものゝふの矢にはぎなれし吳竹も千代のいろそふ君が御代かな

ためしなき色こそ見ゆれくれ竹の實をはむ鳥もいまか出づらむ
いつみてもかはらぬ色を直きのみ竹のみさをとおもひけるかな
ふしごとにこもれる千代は吳竹のかはらぬ色にあらはれにけり
うちなびく世の姿さへみゆるかなみそのゝ竹のふかきみどりに
かげたかき雲居のにはのくれ竹はいく代重ねしみどりなるらむ

河水 久澄 (明治十五年)

五十鈴川きよきながれのみなかみを思へばとほき神代なりけり
あしびきの山より出づる河水にうごかぬ御代のかげもみえつゝ
むしろ田の五貫川はあしたづの千代のかげみるかゝみなるらむ
不二川のきよき水上たづぬればかみよのゆきのしづくなりけり
ちはやぶる神代ながらにすすがはすめるや御代の姿なるらむ
隅田川いく世すみきて君が代のうれしきせにはながれあひけむ

平尾歌子

加部殿夫

小出 榮

前田利暎

唐橋貞子

伊東祐命

松波資之

渡 忠秋

仙田守夫

植松務子

税所敦子

池原香稗

大澤清雄

葉若清足

伴たま子

千種有任

島津忠寛

樹下範子

加藤吉啓

砂川雄健

熊谷鶴城

四海清 (明治十六年)

四方のうみ波しづかなる君が代にみつぎの舟もかすやそふらむ
よもの海にごらぬ水のみなかみはおほうち山のしづくなりけり
千代かけて濁らぬ君がよもの海にいけるかひをも拾ひけるかな
くもりなき大御心によもの海のしほもかなひてすみわたるらむ
よもの海おとせぬ波のうへにこそこのどけき年はたちかへりけれ
よもの海すめるをみればくもりなき御代の光のうつるなりけり

晴天鶴 (明治十七年)

あさ日影つばさうけて舞ふ鶴はくもらぬ御代を空にしるらむ
かぎりなくはれたる空になくたづの聲千里まできこゆべきかな
限りなくはれたるそらに聞ゆなり君がちとせのともづるのこゑ
舞ふたづの羽も動かすなりにけりいかにのどけき雲居なるらむ

青雲のかぎりもしらぬおほ空をひとりしめたるたづのこゑかな
はれわたるみ空をおのがものにしてこゝろ廣くもあそぶ鶴かな
あさ日かげのどけきそらにまふ鶴をわが門松のうへにみるかな

雪中早梅 (明治十八年)

春をまつ梅のこゝろもしらゆきのしらでや花にふりかゝるらむ
冬でもるまどの白雪しらぬ間にさきそめぬらしうめが香のする
もゝしきの大内山のゆきのうちに梅もにほひてとしたちにけり
ふりつもる雪よりほかの色もなきあしたの風にうめが香ぞする
雪のうちにかをれる梅もあるものを年のみたつと思ひけるかな
雪のうちにうめの初花さきにけり君がかざしにさゝげてしがな

縁竹年久 (明治十九年)

新世のかせになびけどくれ竹の千代のいろこそかはらざりけれ

高倉壽子

丸岡莞爾

荻生田清左衛門

小出 燦

香川景敏

三木貞健

柳原愛子

大河内みれ子

三上文子

小出 燦

辻 光賢

井上利輔

伊藤三代

毛利元徳

千家尊福

室町清子

木村正謙

布川正沖

吉田 諏訪子

税所敦子

こゝのへの御階のもとくれ竹はわかみどりなり年はふれども
くれ竹のへにけむ千代はしらねどもなほうら若き色ぞみえける
君が代のちとせのほかにかにしきはみその竹のみどりなりけり
君が代のめぐみのつゆのかゝらずば竹のみどりも久しからめや
うつしうゑし身は老いぬれど吳竹は昔ながらのみどりなりけり

阿部 恪子
谷 勤
水 莖 磐 樟
長岡 銀 藏
松本 與 平

池 水 波 静 (明治二十年)

四方の海しづかなる代を波たゝぬ御池のみづにみそなはずらむ
あさ日かげうつりそめたる方にのみ浪はありともみゆる池かな
大空のくものかげのみうごきけり朝しづかなるいけ水のうへに
あしたづの千代のかげみる池水は波のたちるものどけかりけり
君が代によそへてみればしづかなる池のおもても波はありけり
池水にうかびてねぶるにはとりのゆめにもさはる波なかりけり

大谷 光 尊
下田 歌 子
小池 道 子
鶴 久 子
寺田 政 成
桑名 淳 素

年たてば水もわかきにかへるらむ波のしわなきいけのおもかな

小貝 謹 三 郎

雪 埋 松 (明治二十一年)

いけみづにうつろふかげは緑にて松の葉しろくゆきふりにけり
白ゆきをいたゞきながら大君のみかきのもとにたてるまつかな
たづがねをうづみ残して大宮のまつの上しろくゆきふりにけり
あさづく日ひかりまばゆくさし出でぬ雪ましろなる山松の上に
埋もれぬものなき雪にいちじろくみゆるは松のすがたなりけり

柳原 愛 子
牧野 峰 子
福崎 季 連
金原 和 彦
三輪 貞 信

水 石 契 久 (明治二十二年)

五百引の千引のいはにかゝりけりよろづ代たえぬ瀧のしらいと
しめはへて神といつける大岩をめぐるしみづもいく代へぬらむ
おちたぎつ瀧の岩かどなれにけり幾代かゝれる水にかあるらむ
河上のゆついはむらの苔ひたすみづのながれもいくよへぬらむ

室町 清 子
伊東 祐 命
谷 勤
尾崎 央 夫

さいれ石のこれやむかしの友ならむ岩根はなれぬやまがはの水
青淵にしづむいはほはいつの代に流れとまりしさゝれなるらむ
君が代のためしにひかむ動きなきいはほにかゝるたきの白いと

村林繁枝
青木文七
原屋千代太郎

寄 國 祝 (明治二十三年)

ひとすぢの君につかふる御國には神代ながらのおみもありけり
浮寶四方のくによりよりくなりなみかせたゝぬあきつしまねに
みつぎものゆるされし世の煙にもたちまさるまで國はとみたり
大海をよもにたゝへてわたつみの神もまもらすうらやすのくに
いにしへにてらして今をあふぐにもあまるはくにの光なりけり
北の海にとるやひろめのいや廣く國もひらくるきみがみよかな

小池道子
島 重 遠
橋村淳風
山口利雄
須川信行
西野前知

社 頭 祈 世 (明治二十四年)

君が代をいのるまことはゆふだすきかけぬ先より神やうくらむ

税所敦子

われはわが稻荷の山のたまがきのあけくれ御代を祈るばかりぞ
たてまつるぬさの辛櫃あけくれに祈るは御代のさかえなりけり
人ごとにまゐる社はかはれども御代をいのるはひとつなりけり
君が代を八千代と神に祈るこそねがひなきみのねがひなりけれ
君が代をいのるこそろは神路山たかきいやしきかはらざりけり
民ぐさのなびさそろひて大御代をいのるは神もうれしかるらむ

近藤芳介
田中尙房
松波賢之
藤村叡運
森川頼次
川畑 梓

日 出 山 (明治二十五年)

あさなく／＼同じ山よりいづる日の影もあらたにみゆる今日かな
とこしへに動かぬ山をいづる日や静けきみ代のひかりなるらむ
ひむがしの山ぎはあかくなりにつけり天津日影やいまのぼるらし
天の戸をあけそめし世はしらねども峰の朝日のかげのさやけさ
よをてらす天つ日かげは日本の本の山をいづるやはじめなるらむ

税所敦子
隈元棟貫
長與保子
戸川直人
山瀬辨次郎

あしびきの山のあなたや春ならむいづる朝日のかげのどけさ

大久保芳治

巖 上 龜 (明治二十六年)

君が代はふちにひそめる龜もなしはほの上によはひかさねて

近衛忠熙

きみがよはいはほの上すみなれて龜も淵にはひそまざりけり

淺井光政

さゝれ石のとほき昔の世がたりはいはほのうへの龜ぞしるらむ

粟田廣治

大庭のいけのいはほにすむかめはよもぎが島もおもはざるらむ

川畑 梓

はひのぼるあまたの龜の萬代をいはほのうへにかさねてぞみる

鈴木久亮

いたゞきにのぼりてねぶる石龜をかさなる岩とおもひけるかな

遠山英一

梅 花 先 春 (明治二十七年)

春風もまだふきそめぬおほにはのいづこなるらむ梅が香ぞする

北島以登子

春またでほゝるむ梅は君が代としのはじめやうれしかるらむ

佐々木濱子

大御代のめぐみをうけてさく梅は春のひかりもたのまざりけり

宇佐美祐次

おくれぬをおほ御心とみそのふのうめは春日をまたで咲くらむ

長尾尙六

梅の花はるよりさきに咲きいでゝひとりのどけき香に匂ひつゝ

松元時直

いざ折りてをがめにさゝむ梅の花あとに春まつえだもありけり

山添直治郎

寄 海 祝 (明治二十八年) 御休會

寄 山 祝 (明治二十九年)

ちはやぶる神の御國のくらゐやまいよく高くなれる御代かな

小池道子

君が代のちとせを祝ふことのはのちりもつもりて山となるらむ

宇高正朗

はるかなる南の山のよろづ代もわがおほきみのみてにいりにき

大口鯛二

日の本の上になつべきくにぞなきふじよりたかき山はあれども

井上わかな

うごきなきわが大君のたかみくらよそへまつらむ山なかりけり

三浦義住

すめらぎの高きみいづくらぶべき山こそなけれ山はあれども

伊藤雅勇

松 影 映 水 (明治三十年) 御休會

新年雪 (明治三十一年) 御休會
田家煙 (明治三十二年)

小山田のけぶりの末にみゆるかな年のみつぎのあまりあるよは
いづこまでしづが家居のつゞくらむ山田の末もけぶりたつなり
家ごとに八束たりほのたれりとは空にしられてたつけぶりかな
たちのぼる山田の里の朝けぶりよはゆたかにもみえわたるかな
にひばりのいその田づらも人すみてしほがまならぬ烟たつなり

松上鶴 (明治三十三年)

大庭の松のはやしのふかければむれるたづのかずもしられず
不二の根も葉ごしにみゆる大庭の松のこすゑにたづぞなくなる
あさ日さす高根の松はたかけれどさやかにみゆる鶴のかげかな
大君のちとせをよばふたづがねに松のあらしもしづまりにけり

護得久朝常

水原慶夫

高山保次郎

菅井清光

渡邊俊明

税所敦子

田中瀧子

三輪義方

尾上八郎

松の上になづがね高くきこゆなりとしの初日やいまのぼるらし

原田勇藏

雪中竹 (明治三十四年)

ゆきの中に根ざしかためてわか竹のおひいでむ年の光をぞ思ふ
ゆきにふす竹をおこして新玉のとしほぎびとをいざむかへてむ
うぐひすの千代の初音をまたれける雪おもしろき竹のそのふに
年のたつあさにはきよし吳竹のちよしめなはにゆきもつもりて

中島歌子

龜一山

小島新吉

伊藤秀子

新年梅 (明治三十五年)

梅の花ほゝるむみればくさも木もうれしき年のはじめなるらむ
ささいでし軒端の梅をまづほめて年のほぎごといひおくれけり
大君のみうたはじめにうたはれてうめもうれしき年やしるらむ
海原のなみもしづかに年たちてはるめくいそにうめかをるなり
あらたまの年たつ庭にさく梅はたゞひとはなもうれしかりけり

小池道子

東胤徳

鈴木小舟

水野重子

貝谷鉦二郎

うれしくも年のはじめに梅さきぬ瓶にやさゝむかざしにやせむ

石川老之助

新年海 (明治三十六年)

みめぐみの波をかづきてあまの子も年のほぎ言いひかはすらし

平田三枝

ゆたかにも朝しほみてりわたの原としての初日のかげをうかべて

則武正副

あら玉の年のはじめのよろこびをたへたりともみゆる海かな

根岸澄江

ふじのねのゆきの光にあけそめて年たちかへる田子のうらなみ

中野知佳

うらなみにあまのよび聲とよむなり年の初網さちこそあるらし

小出楯子

のどかにも年たつ浦のはつあびきおものゝ鯛やまづかゝるらむ

西村孝之助

ふねはみな湊にいりて年のたつあしたしづけきうみのおもかな

北里直樹

巖上松 (明治三十七年)

あら波のよするいそべの岩の上にことぞともなくたてる松かな

豊時鄰

はひかゝる葛のかづらを注連にして神さびたてりいはの上の松

竹下種長

年をへし松もこまつとみゆるかな根ざすいはほのかげ高くして

松浦辰男

なみ風をしのぎてたてるわた中のいはほの松をこゝろともがな

進藤朔子

わたなかのいはほにたてるひとつ松常世のなみや種はよせけむ

藤村叡運

さかえゆく春のみ山の岩のうへに生ひそふ小松かすもしられず

北川すゞ子

ちはやぶる神代の松かしまつどり鶴戸のいはやの上にとてるは

宇都宮村雄

新年山 (明治三十八年)

かちどきの聲に動かぬ山はあらじ世はしづかなる年のはじめに

奈良原繁

いくさ人いさをゝつみし山の上に年のはつ日やさしわたるらむ

小倉文子

世はなべてにぎはふ民のかまど山けぶりのどかに年たちにけり

吉田實

あらたまの年たつ杣が斧はじめひと日にぎはふやまのおくかな

鈴木源太郎

つはものめにめし出されしわがせこはいづこの山に年むかふらむ

大須賀まつ江

ためしなき年をむかへてあふぐかなおほうち山の高きみいづを

田村直喜

新年 河 (明治三十九年)

なみならぬ年をむかへて河のせのかみしもとなく祝ふ今日かな
家にあるちよはことしも谷川のながれをくみてとしむかふらむ
たゝかひは海にくぬがにかつら川かちわたりてもあくる年かな
河口はにぎはひにけりあらたまの年のはつ荷やいまつきぬらむ
五十鈴川みなかみとほき神代にもためしをきかぬ年たちにけり
あだ波もしづまりはてゝゆく水の音なしがはにとしたちにけり
ゆたかなる御代の光やあふるらむとしたちかへるとみのを川に

四四

遠山 稻子

林 高房

山領 利貞

長尾 ふみ子

柳町 久四郎

川出 眞清

高山 益代子

新年 松 (明治四十年)

ときは山木ごとにむすぶ松かさのかさなる年をいはふ今日かな
いく千代の年のはじめを祝ひきて松はときはのものとなりけむ
年々にたかくなりゆく松の上にとしもあふぐはつ日かげかな

慈光寺 仲敏

額賀 大直

柴田 承柱

松風のちよのこゑこそあらたまの年のよごとのはじめなりけれ

仙田 敏徳

たてまつる年のよごとのかすくゝにひかるゝ松やいかに嬉しき

名取 正代子

もひとりかくむ若水に君が代の千代田のまつのかげうつるらむ

藤吉 三近

朝日さすはるのみやまに年たちて小松のたけものびまさるらむ

森山 まん子

社 頭 松 (明治四十一年)

ひろまへにたちさかえたる老松の千代のかげくむみたらしの水
みづがきの松ふさわたる朝風はかみのみこゑのこゝちこそすれ
ひろまへに杖ゆるされし老松はかみにつかへていく代へぬらむ
神路山としごもりしておほまへの松にはつ日をあふぎつるかな
こま犬もこけむしにけり千代をへし神のいがきの松のしづくに
ちはやぶる神のひろまへ長閑にてたづもあそべり松の木かげに

高島 千畝

徳大寺 伊楚子

大町 壯

奥田 大和

木村 忠彦

鷺尾 とみ子

雪 中 松 (明治四十二年)

四五

君が代のいくちよこめてつもるらむ小松が原のけさのしらゆき
ふりつもるゆきにたわまぬ松をみて老もさむさを忘れけるかな
たかむらは雪にうもれておい松のひともとかたくみゆる庭かな
松かげはかへりて深くつもりけり木末のゆきのしづれしづれて
とよ年のしるしのゆきのふりつむは松もおもしと思はざるらむ
かくしつゝちよの根ざしやかたむらむ雪にうもるゝ野べの若松
若水をくむやつるべのさをふれて片枝しづるゝまつのしらゆき

新年雪 (明治四十三年)

ふるゆきをまづめづる哉つきはなのたのしみながきとしの始に
年のたつあしたの雪をはじめにて嬉しきことのなほつもらなむ
としほぎにいでし一日は晴間にてゆきにこもれる松のうちかな
いとまある年のはじめに嬉しくもふらばといひし雪ぞふりける

山の井のこほりくだきて若水をくむそでしろくたまるゆきかな

寒月照梅花 (明治四十四年)

大空はしもぐもりしてさくうめの花のみしろしありあけのつき
しも白きよとの庭に月てりてうめが香さむしかせはなけれど
ふゆごもる人のこゝろをうごかして霜夜の月にはふうめかな
千鳥なく野川のつゝみしもみえてさむき月夜にうめかをるなり
ゆきふかきくだらの野べにさく梅もへだてすてらす冬の夜の月

松上鶴 (明治四十五年)

あさ日さす小松が原にあしたづの千代の聲こそしげくきこゆれ
あしたづももとをわすれぬ心より巢だちし松はたえずとふらむ
よる波のほのみえそめてあけがたのいその松原たづぞなくなる
ひなづるの千歳をよばふひとこゑに老木の松もわかかへるらむ

江崎まき子

小池道子

柴田元子

折田種春

外山且正

安部政太郎

梶村平五郎

高島張輔

片岡久太郎

堤盛言

長岡秋道

桑原保松

藤原愛子

大島爲足

大屋久子

奥村儀道

許焱

藤原祥子

伊藤榮治郎

坂本芳子

植松徳子

たづは皆ものと木すゑにかへりけり濱の松かげしほやみつらむ

三輪經年

(大正二年) 御休會

社 頭 杉 (大正三年)

みあかしはまだみえながら神垣の杉のこのまぞしらみそめたる
みけどのゝ煙なびきてかみがきのすぎのはやしにあさ風ぞふく
神垣に杉の若木をうつしうゑて御代のはじめのしるしにはせむ
千代へたる杉よりほかのかげもなしみたらし川の清きながれは
雲しのぐいがきの杉にみゆるかななほきをまもる神のこゝろも

植松義太郎

尾崎眞治

木原勝太郎

井上重徳

福長正信

(大正四年) 御休會

寄 國 祝 (大正五年)

みめぐみの到らぬくまもなかりけり國の廣さはましにませども
大八洲くにはじめは遠けれどさかゆくするはかぎりしられず

小林守直

徳永元子

しろしめす君が御國となりしよりとりのはやしも神はもるらむ
よもの海みなはらからとならむ後おやとあふがむくにはこの國
臣となり民とならばとつくにの人のうらやむうらやすのくに
たちさわぐ音は千里のほかにして波しづかなるうらやすのくに

新納時守

片山菅雄

北朴木ひさぶ

本多成允

遠 山 雪 (大正六年)

あざやかに今朝は見えけり見えぬ日もありし遠山雪のつもりて
火うちなだ波路の末の雲はれて伊豫のたかねにゆきふれるみゆ
松青き山はこなたにつらなりてをちのたかねぞゆきましろなる
秩父嶺はけさゆき白し千鳥なくあらかはづみかせさむくして
朝日さす不二の高根はとほけれど雪はみやこのひかりなりけり
ゆき白き峯こそみゆれむらさきの色にあけゆくやまのかひより
白妙のゆきにあさひのかげさしてをちの高根もまばゆかりけり

諸角友平

堀野林治

別所光治

松本みち

井關鐵之助

掛布善右衛門

丹下萬吾

海邊松 (大正七年)

あだなみのよせしは遠きむかしにてうらしづかなりちよの松原
 よろづよの聲をつたへてうらくの松より松にかせふきわたる
 たゝら濱老木のまつは神かせのふきし世よりのみどりなるらむ
 おきつなみよするありそに一もとの老松たてりますらをのごと
 いそ山の松きはやかにあらはれて波こそゆれのぼるあさひに
 をすくにのちよのまもりとしほ風にきはひてたてりいその松原
 よせくるはとこよの波かいつみてもありその松の面がはりせぬ

矢野 詮
 中村 保
 上野 荒雄
 上田 三郎
 青木 穠子
 田島 壯二郎
 遠藤 二郎

勅題詠進の葉終

大正七年十一月十二日印刷
 大正七年十一月十九日發行

勅題詠進の葉

定價金四拾錢

弘風會編輯部編纂

編輯者兼

澁谷哲吉

東京市本郷區根津八重垣町六十九番地

印刷者

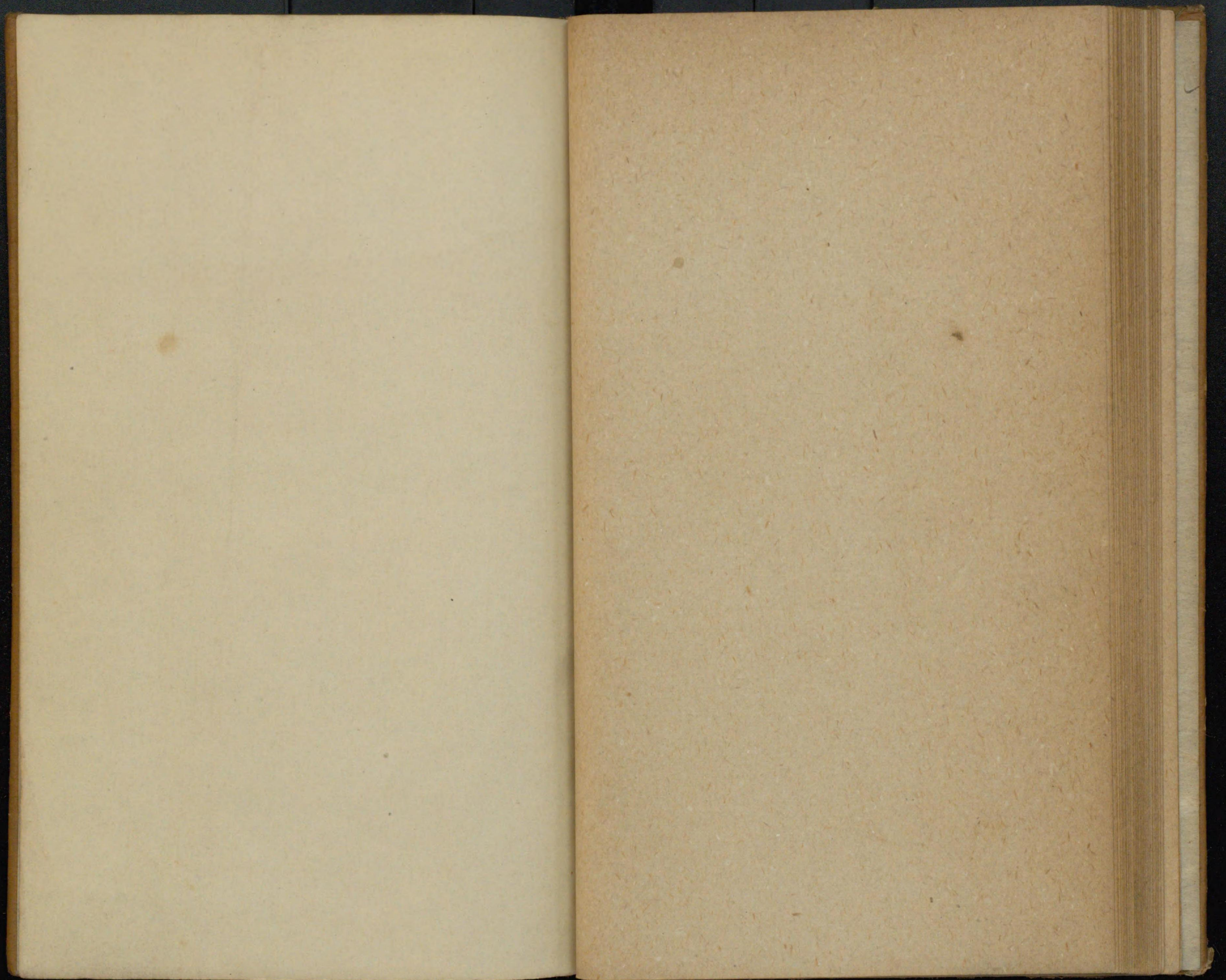
佐伯外美雄

東京市小石川區小日向台町三丁目四十三番地



不許複製

發行所 東京市本郷區根津八重垣町六十九番地 弘風會



186
241

